12

夏は土砂崩れ、冬は積雪と格闘しながら車で山を登る

ヒマラヤの神秘の大地アルナーチャルで調査を始める——森林とヤク放牧（2007～2009年）

アルナーチャル・ヒマラヤで調査を始める

2007年、インドのヒマラヤ地域、アルナーチャル・プラデーシュ州で調査を始めた。総合地球環境学研究所の高所環境プロジェクトで、いくつかある班のうち農業班のリーダーである京大の東南アジア研究所の安藤さんに誘われて、農業班の調査地であるインドのアルナーチャル・プラデーシュ州を7月中旬から訪問することになった。安藤さんたちとスケジュールの調整を行ない、7月15～28日にインド、8月3日～9月24日にナミビア、マラウイ、フランス、タイと長期調査旅行に出ることにしていた。しかし、インドへの出発の1週間前くらいになって安藤さんから、インドへの出発を1週間遅らせてほしいと伝えられる。安藤さんに理由を問うと、「かみさんの誕生日を忘れていた」という返答だった。毎年奥さんの誕生日に家族で誕生日会を開くのだが、その日がインド渡航の日程と重なるようだ。しかし、アフリカなどの飛行機のチケットは購入済みなので、ずらすことはできない。安藤さんの奥さん想いの姿には感動すら覚えるものの、一方では、そんなに大事な奥さんの誕生日会なら、スケジュール帳にでも記入しておいてほしいとも思った。結局、私と琵琶湖博物館（現岡山理科大）の宮本さんは予定通り先に出発し、安藤さんとは1週間後に現地で合流することにした。

太陽と月の精霊を崇めるアパタニ民族

関西空港からバンコク経由でコルカタに到着し、コルカタからアッサム州の州都であるゴワハティに飛んだ。ゴワハティでは、ゴワハティ大学地理学教室を訪問して、情報交換や資料収集を行なった。ゴワハティからアルナーチャル・プラデーシュ州の州都のイタナガールに移動し、そこで本屋を訪れて資料を収集した（図12－1）。イタナガールからは、すでに農業班の研究者らが調査を始めている州中西部のジロー地方に移動し、そこに滞在して現地観察を行なった。

ジローは、太陽と月の精霊「ドニ・ポロ」を崇めるアパタニ民族が高床式の家に暮らす地域である（写真12－1）。アパタニの女性は伝統的に、顔に施す刺青（いれずみ）と、黒く焼いた木の栓を鼻にはめ込む習慣があり、高齢の女性はその習慣を今でも守っている（写真12－2）。シャーマ

ンが唯一ドニ・ポロと交信でき、神のお告げなどを村の住民に伝える役割を果たしている。各村の手前に水田があり、水田の畦（あぜ）にはシコクビエを作っている（写真12－3）。アパタニ民族は竹を重要視し、各村の周囲には必ず村で管理する竹林があって、住居の外壁や内装には竹がふんだんに利用されている（写真12－4）。

アルナーチャル・プラデーシュ州内では東西に道路が走っておらず、東西移動はアッサムまで南下し、ブラマプトラ川沿いの道路を使って西に移動し、再度北上するというルートを取る必要があった。ジローを出た我々は、アッサムのノースロキンプルまで南下し、ノースロキンプル大学の地理学教室を訪問した（写真12－5）。そこには、農業の犂（すき）を研究している安藤さんから収集を依頼された現地の犂が保管されていた。その後、当時安藤さんの指導院生であった浅田さん（現奈良女子大）が滞在している民家を訪れ、彼の調査状況を聞いた後、タワンに向かった。その日は夜の9時頃にアッサム州とアルナーチャル・プラデーシュ州の境界に位置するバラクポンにたどり着いた。

図 12-1　アルナーチャル・プラデーシュ州の位置図

翌朝、バラクポンを出発し、ディランを経由して、アルナーチャル・ヒマラヤの標高4200mに位置するセラ峠に向かう（写真12－6）。峠に近くなると、霧の中に可憐に咲き誇る高山植物の群落に出迎えられた（写真12－7）。峠を越えてタワンに夕方5時くらいに到着した。その1時間後に安藤さん一行も到着した。ディランにはディランモンパ、タワンには

写真 12-1　アパタニ民族地域のジロー周辺で見られる精霊信仰

写真 12-2　アパタニ民族の高齢女性。アパタニの女性は、伝統的に、顔に施す刺青と、木の栓を鼻にはめ込む習慣がある

表 12-1　モンパ民族の区分（現地での聞き取りから作成）（水野 2012a）

タワンモンパ	タワンモンパ：ウンパ（農耕民）
	ダクパナンパ：ウンパ（農耕民）
	ツォクスンパ：ウンパ（農耕民）
	マゴパ（ティンブパ）：ブロックパ（牧畜民）
	パンチェンパ：ウンパ・ブロックパ（農耕民・牧畜民）
ディランモンパ	ディランモンパ：ウンパ（農耕民）
	リスパ＆チュッグパ：ウンパ（農耕民）
	ブートモンパ：ウンパ（農耕民）
	ブータン国境のブロックパ（牧畜民）
カラクタンモンパ：ウンパ（農耕民）	

注：タワンモンパは、ディランモンパやカラクタンモンパと言語が異なる。
ダクパナンパは、狭義のタワンモンパと言葉が少し異なる（アクセントが違う）。
マゴパ（ティンブパ）は、チベットに住むチベット人と言語や民族衣装が同じ。
パンチェンパは、狭義のタワンモンパやダグパナンパと言語が異なる。
狭義のディランモンパは、東ブータンとほとんど言語が同じ。
リスパとチュッグパは、周辺のディランモンパと言語が異なる。
ブートモンパは、ボンディラ付近のシェルドックペンと言語が同じ。
ブータン国境付近のセンゲゾンパやニュクマドゥンパ、ルブランの人々は、ブータンのメラック、サクティンの人々と言語や民族衣装が同じ。
カラクタンモンパは、東ブータンと言語が同じ。

写真 12-8　マニの横を通ってタワン仏僧院に向かう、伝統的衣装を身につけたモンパの女性たち。若い女性たちは新年やお祭り、伝統的行事のときのみ伝統的衣装を身につける

写真 12-4　竹を建材として作られた高床式のアパタニ民族の住居

写真 12-3 水田とその畦に作られているシコクビエ

写真 12-7　セラ峠周辺のお花畑

写真 12-5　ノースロキンプル大学を訪問

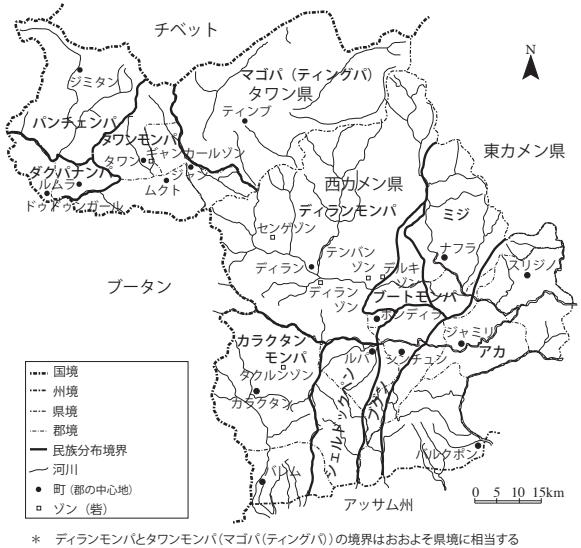
写真 12-6　ディラン地方とタワン地方を結ぶ冬のセラ峠（標高4200m）。セラ峠の両側の山地斜面にはインド軍が多数駐屯して、中国からの攻撃に備えている

タワンモンパの民族の人々が居住し、伝統的衣装も同じであるが（写真12－8）、同じモンパでも両者は言語が異なるため（表12－1）、互いに会話するときはヒンディー語を使用する。

地滑りで道路をふさがれ停滞する

翌日はタワンからチベットやブータン国境に近いジミタンまで行って、その日のうちに戻ってくる予定だった（図12－2）。ジミタンにはパンチェンパ民族の人々が居住している。ここには有名なチベット仏教のゴムサム・チョルテンという仏塔がある（写真12－9）。現地で、安藤さんが農業や農具の聞き取りを行ない、それは夕方4時くらいまで続いた。タワンに戻る途中の村では棚田が見られ、そこの標高は1752mで、このあたりの最高所の水田と思われた（写真12－10）。また、高度1612mの場所に陸稲のもち米の田んぼもあった。稲作は概ね標高1700m以下で行なわれているようだ。穂をつけていない農作物が稲かどうかを調べるためには、イネ科植物の特徴は葉舌（ようぜつ）と葉耳（ようじ）があるので（写真12－11）、それを確認すればよいと教えてもらった。

タワンまで戻る途中で日が沈み、暗闇の中で車のライトに照らされたのは、地滑りで崩落した岩や土砂が覆う道路だった。その先は暗闇の中でどうなっているのかわからず、とりあえず、近くの村まで戻ることにした。比較的大きな村には、地方の役人が宿泊する施設がある。その日はとりあえずそこに泊まることにした。



＊ ディランモンパとタワンモンパ（マゴパ（ティングパ））の境界はおおよそ県境に相当する

図 12-2 アルナーチャル・プラデーシュ州のタワン県と西カメン県における民族分布（水野 2012a）

写真 12-10 最高所の水田（標高は1752m）の棚田

写真 12-9 チベット仏教の仏塔、ゴムサム・チョルテン

14

少年を生け贄にして悪霊に捧げる儀式とは!?

ヒマラヤの神秘の大地アルナーチャルでの調査
——精霊崇拝とポン教、チベット仏教（2011年）

見つけた古い写本から王族の歴史をたどる（2011年2月インド調査）

モンユル（モンパ民族地域）にチベット吐蕃王国の王族が追放されてやってきたことはいくつかの歴史書でわかっていたが、その後がはっきりしていなかった。しかし、いろんな人をたどってやっとのこと、その後の歴史がチベット語で書かれた古い写本を見つけることができた。それまで何度も訪れていたグントゥン村の在家の僧アウザ氏に、「何か古い資料はないか?」と尋ねて出してくれたのが、この写本である。そのときのうれしさは言葉に言い表せない。

この写本は、ヴァーギンドラ（ガワン）著の書物で、書名は『ギェルリク・ジュンクン・セルウェー・ドンメ』（王族の起源を明らかならしめる灯明）というブータン撰述の歴史書（成立は17世紀後半〜18世紀前半）である（写真14－1）。その書物の別の写本は、マイケル・アリスによって内容が論文で示されている。今回見つけた写本はチベット語で書かれてあったので、アウザ氏が口頭でディラン語に翻訳してくれて、それをガイドのパッサンが聞き取りながら英語に翻訳してくれたのであった。そのとき、私が書名をアウザ氏に尋ねたところ、誤って別の書名を言った。私はそれをそのまま信じて、『神秘の大地、アルナチャル－アッサム・ヒマラヤの自然とチベット人の社会』（水野一晴 2012、昭和堂）にその誤った書名を示したのだが、本には写本の見開き2ページ分の写真を載せていた。その拙著をチベット研究者に謹呈したところ、その研究者がマイケル・アリスの論文を読んでいたため、書名の間違いに気がついてくれた。そのため、*Himalayan Nature and Tibetan Buddhist Culture in Arunachal Pradesh, India: A Study of Monpa*（Mizuno, K. and Tenpa, L. 2015, Springer）では、書名を訂

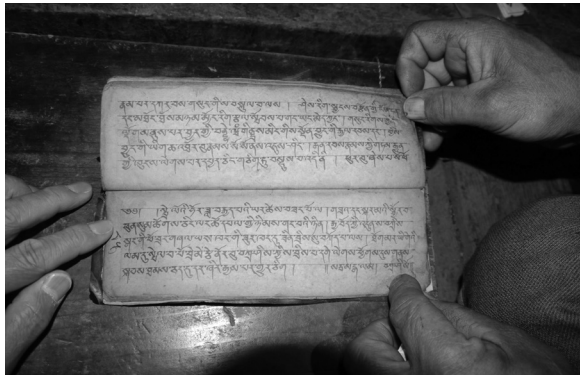


写真14-1 『ギェルリク・ジュンクン・セルウェー・ドンメ』（王族の起源を明らかならしめる灯明）というブータン撰述の歴史書（成立は17世紀後半〜18世紀前半、ヴァーギンドラ（ガワン）著）の写本

正している。ちなみにマイケル・アリスはアウンサンスーチーの夫である。

その歴史書によって、その後がある程度理解できた。詳細は先述の拙著（水野 2012, Mizuno and Tenpa 2015）に譲るとして、ラセ・ツァンマの3代後のガプダ・ツァンは王となるために、今のテンバンの下方の地域カールウォン（ワォングメイ・カール）に連れてこられた。しかし、この地域の人々は貧しかった。ガプダ・ツァンにはグングレイ・ゲイルとワォングメイ・ペイルダーの2人の息子があった(図13－1)。この2人の息子は、その地に何もなかったのでチベットに戻った。弟の方のワォングメイ・ペイルダーはチベットに戻ったものの、また2人の護衛を連れてカールウォン（ワォングメイ・カール）に戻ってきた。戻ってきたとき、村のツォルゲン（村長）のアハゲイルが「あなたは王の子孫である。あなたはこの地域を治めるべきだ」と彼に告げた。

この『ギェルリク・ジュンクン・セルウェー・ドンメ』に書かれてある歴史に関連して、テンバン村で私は次のような伝説を複数の村人から聞き取った。

王は低いクランの女性と結婚したためブートモンパの従者によって追放されてしまい、ブートモンパの従者たちは新しい王を欲した。そこで彼らは、ヤクとゾ（ヤクと高地牛の交配種）とヤギとヒツジの足を持って村々を回り、ヤクの足を正しく選べる人物を探した。しかし、正しく選ぶことのできる人物はなかなか見つからず、チベットで正しく選べる人をやっと見つけることができた。ブートモンパの従者らはその人に王になってほしかったが、あえてそのことを告げずに狩りに連れ出し、ムギー・チャン湖（セラ峠の近くにある湖の伝説上の名前であり、実在の湖はペイラデセ湖またはセラ湖と呼ばれている、写真14－2）まで来たところで、王になってほしいことをその人に告げる。するとその人は左右の目から2つの涙をこぼし、その涙が2つの湖となり、2つの湖はくっついて1つの大きな湖となった。彼らはそこから旅を続け、タワンのあたりから従者らは王に「ここはあなたの土地です」「ここもあなたの土地です」と告げていき、そこでの出来事から地名を付けていった。

（例・王が寒がった場所→チャングラ、王の衣服を入れるために利用した鉄の器を持った人がいた場所→トゥングリ）

写真 14-2　ムギー・チャン湖